図 1



A.K.Coomaraswamy in 1916, photograph by Alvin Langdon Coburn

### 炎の 試練

K 反植民地主義思想の クーマラスワーミと柳宗悦との 往還

〈あい

を繋ぐもの

### 賀

ブレイクやホイットマンへの参照も両者に共通する。 マラス てインド古典にも深い造詣をもち、 その軌跡は、 ワ Ì (1877 1947) (図一) 中世主義や工藝への関心において、 は インド美術史研究の基礎を築いた学究として知ら 晩年には だが両者を比較した研究はなお限られる 「永遠の哲学」 philosophie pérenniale 日本の柳宗悦 (1889―1961) と好対照を (久慈二〇 に接 n

ヴェ

ダをはじめとし · K

アナンダ

ク

近した(葛西

一九八四)。

日本帝 〇五、金谷 二〇〇五)。 いだ〉を司る媒介項を思想と工藝の具体相に探り、 地主義の高まりという時代背景のなかでの、 める鍵は存在しなかったのか。 国に併合された朝鮮と。 に燃える「炎」をめぐる思索の跡を追跡したい 両者を隔てる 第一次世界大戦後のアジアにおける反植民 その対比を手がかりとし 〈あいだ〉 大英帝国治下の とは何か。 「用と美」「東と西」 そしてそれを埋 š インドと、

# 「アジアはひとつ」とアドヴァイタ

黄金 (Tagore 1929; 1996: 605)° Ideals と響き合うなら、 伝統を、陶磁が高く評価はされないインドで演じてみせた。 心人物となるスリランカ出身のアナンダ・K・クーマラスワーミ の糸の 高揚期にカルカッタで 日本の茶匠は外国では無名の器を、その元来の文脈から外すことで茶器として美的に利用する。 恍惚としてそれを愛でたのだという。 九二九 民主義的な論文「インド美術の目的」(AKC 1908) でこう述べる。 三は認識していた。 ンドの思想の総合は「一」であって多ではな ように、ウパニシャッドの理想主義がつらぬい 最期となる来日を果たした詩人ラビントラナート・タゴール 「一」は advaita と呼ばれる。 一九 その覚三がインドで原稿を脱稿した英文著作 「国産商品購買運動」にも関与した若き日のAKCは、 〇二年にベン インド人たちがそこに美の本能など感じることもできなか ガルに滞在した覚三は、農民が使う安価な素焼きのランプ壺を買 V のだから、 いている。 高級藝術と低級藝術との区別も、 ೬ೢ そしてこの統一原理も理想主義である。 (以下AKC)にも感化を及ぼ インドのあらゆる藝術の流派には一本の 「理想主義」idealism が覚三の 『東洋の理想』(okakura 1903) は、 岡倉覚三の回想を漏らして 覚三の著作から 欧米の す。 の引用も見え スワデシ運 は、 価値観 つたの 岡倉はその

ジアのもろもろの理想となる。 の思想を取り入れたもの、とされる。 波紋が渚にひとつひとつ刻まれているのだから」(Okakura 1903/2007: 13)。 彼は室生寺の真言僧侶で「不二真教」を唱えた丸山貫長に帰依していたのだから。 不二 の思想は覚三の なぜなら日本の岸辺にはそれらの理想が次々と打ち寄せ、 「東洋の理想」にも見える術語で、 だが、 それは覚三にとってインド滞 直接には 「アジアはひとつ」、この覚三の ベ 在以前から親 ル 1 ル で面会したヴィ 日本国民の意識にはそ 「日本美術 しい思想だ 0 0 ベ 歴史はア 力 とい ナン

ultranationalism はGHQによる、 思想」を危険視する、 「八紘一宇」の理念への先駆けへと変貌を遂げる (Murai 2018)。 れた生きた有機体」とも形容された(1903/2007: 6)。そして一九三〇年代末を迎えると、 ーガンは、 【東洋の理想】に序文を寄せたシスター・ニヴェディタによって「単一だが複合した生命を呼吸する 覚三とは別人格の「岡倉天心」像に結び付けられ、 思想史的なイデオロギー批判の根拠となって継承されてゆく 日本敗戦後の後付けの思想規定概念である。 それは日本敗戦後になると「天心」 英文著作の日本語訳により、 (Inaga 「アジアはひとつ」 ، 2012)° 大東亜共栄圏思想 付言す の 「超国家 のス

integrity を鼓舞する潮流を生み出してい 書で彼はこう宣言する。「シンハラの生活、 AKCはイギリスで つも拮抗する。 できる部分など、 AKCにとっても 導入しようとした悪名高い「ベンガル分割令」が、 思想はここでふ セイロンという窓を通じて眺めやると、 に基礎を置 シェイクスピ に 第一次世界大戦の最中、 ح くような社会では ほとんどない。シンハラはインドであり 『中世シンハラ美術』(1908) 「アジアはひとつ」は根本を為す思想だった。「セイロン改革運動」に関与し たた ア没後四百周年記念行事に寄せた文章に、 (AKC 1916/1924 DS: 114)° び、 すべての生命の統一 unityと相互依存 interdependenceとを肯定する。 〈生命の果実〉 た。 インドの大英帝国への支援関与による参戦に対して執拗に反対したA 宗教ないし藝術において、 そしてこの「汎インド主義」は岡倉の インドはより完璧なのだから」(1908/2003: 18)、 を刊行する。 Fruit of Life が容易には手にはい イギリス統治下 (中略) セイロンなきインドは不完全である。 ここにも岡倉の著作からの こう綴る。 インドを参照することなくして十分に の現地では、南アジアの 欧州が戦火に包まれたなか、 「汎アジア主義」と共鳴し らない 引用 が散見する ことを欧 ೬ そ カ 13 1 た当 ・ゾン提 「アジ とい

Interdependence とあるが、 当時「独立」independence は政治的な文脈では、 大英帝国による統治を否定す

って説明しようとする。

だが、 のイン

ヷ゙

ンダ

ーラの女

々しく、

さして重要でもない

藝術

作品に

欧

州

の注目

が集ま

言説にあ

っては、

欧州側

ド認識へ

反駁を含ん

でも

いた。

とかく欧州

側

は

イ

ンド美術をギリ

シ

ア美術に

制転覆を意味

禁忌に等しか

った。

アジア 0

0

統

一と相互依存を旗印とするこの宣言は、

究者たちは、

ギリシア古典があら

ゆる藝術の源泉であ

Ŋ,

西洋の

みならず東洋にお

V

ても古典美術

が

13

重要

などという考えへと靡い

て

14

つ

たのである」、

الح (1908/2003: 256)°

この

一節

は、

覚三の著作に序文を寄せて

2

たが

んめに、

そこへ

のギリシア

の影響が

「無用にも目立つこととなった」。

「なんらか

0

偏見ゆえに、

州

の探

0

仏

の

ッ

ンと取り

澄ました顔立ちや、

物憂く女々

しい

柔和な動作が、

どれほど仏教思想の雄

々

しさや

(DS:54)°

の激情と無縁であるかも、

わざわざ言い立てるまでもなかったことだ」と

H

本におけるAKC受容

らたな種 race

をなすインドの学徒にとっての霊感となる。

覚三が

近去し (図 2)

た一九一三年の

翌年、

それより二年前に世を去ってい

たニヴェ

ディ

夕

0

遗著

ン

ゥ

が刊行される。

その共著者でもあったAKCは序文でこう述べる。

かれらはもはや英国化

anglicise

され デ ピ

ることに不安な

「ニヴェ

1

タ

の K

本

曹

は

あ

持論を堅持する。

「ガンダー

ラ彫刻は仏教藝術の

始原 primitive にして土着な要素とは見做せな

することになる。

A K C は

「シヴァ神の踊

**S**』 (1918/1924)

に収めた「始原

0)

仏教

徒

ح

題

す

Ź

文章

b

ガ

ン

ダ ゔ

ラ

CWSN vol.3:51)°

エ

デ

1

夕

が

本書

『中世シンハラ藝術』

^

の書評に、

原著からそのまま引用した箇所でもある

なら

に この A K C

の発言に触発され

て、 シ

IV

カ

ッ

夕美術学校の校長

エ

ル

ベネスト

ビ

シ

フ

1

ル

*ک*۱

ゖ゙

エ

ル

は

シ

7

0

影響を排除

た

「本質的

1

ド カ

性

なる観念を発案し

インド

-美術

0

理想』(1911-12)

などの

著作

で

図3

る。

0) で

藝術は近代欧

州

0

如き

「藝術のため

の藝術」

で

は

しろ欧州中世と同様

「愛の藝術」

であり、

聖俗に区別

は

の美術

および

工藝

が

印度美術史

として、

蘇

武緑郎

0

H

一本語に

訳出

され

7

V

る。

序文でAK

Cはこう述



アバニンドロナート・タゴール《仏陀の勝利》 Abanindro Nath Tagore, "The Victory of Buddha", Frontispiece, Myths of The Hindus and Buddhists, 1914

図2



A.K.C., Myths of the Hindus and Buddhists, 1914

国民としての理想のうえに基礎づけられ、 ど抱か ガ て て夢を成 や藝術」ともどもここに集成され 9 て鮮明に表現された意図に基づくものであることに、 たちの 夕 いる 13 や女性たちは、 ル 7 朗読を聞き、 ゴ ٠ ル 原 ダラ 0) ネサン الله (Nivedita & AKC 1914: v-vii)° 就する出 知識を獲得してい 手になる水彩の ル 色挿絵 あらゆる真の進歩は、 「ベ jv • ス ン 0 ある 複製挿絵が多数含まれる。 版 (物語が浮彫となって飾られた) 寺院を訪 ガル音ではオボニンドロ Ì 文化運動の記念碑をなす。 物となっ ス[ノンドラル 11 は民謡や聖史劇などから、 ワッ . る た シュ | (v-vi)° つまらぬ (Inaga 技法による作品であ . ヴェデ 1 2004)° その神話 ボシュ」ら、 実際本書に すでに宗教や 政争などとは アバ 1 「文盲だが 0 ニンド ・晩年の 知識 プラー クル] Ŋ, 神話叙 遺志そ ・ロナー 信を抱 ナス て、 「ベ お 0

一三年には、 その ク マラスワーミの大著 1 シド

同時に美術



(1873-1945)

でも忠実に翻訳されている。 一九一七年には、 東京帝国大学の美術史教室創設者、 瀧精 が

刊できるような時代ではない。 滞在中にインド国民との連帯による独立決起をうながす政治的扇動文書を草していたが、もはやこれを英語で公 争での日本の戦勝により、日本は世界の帝国主義勢力の仲間入りを果たした、と自負するに至る。岡倉はインド が激化する一九三○年代末のこと。また第二次大戦末期にはAKCの主著 (AKC 1927) も、 なるインド美術」 「新ナショナリスト」たちによって、 一方で、 ちなみに、このひとたびは忘れられた草稿が『東洋の覚醒』として日の目をみるのは、 一九〇二年、 へと向きを転じ始めたことを報告する。ここで、同時代に至るまでの推移を、簡単に確かめて 九年五月に 「大東亜共栄圏」建設下ならではの出版だが、 岡倉のインド滞在初期の一月三〇日に、 一九一三年の岡倉の没後、 『印度及び東南亜細亜美術史』として二○○○部の刊行がなされて ガンダーラ美術への信憑性に対して疑問が付され、研究の主軸が 骨董雑誌』に「健駄羅藝術の批評に就て」と題する文章を発表 一九一七)。ここで瀧はクーマラスワーミとハヴェルに言及し、 四半世紀にわたり、 高度な学術的達成である 日本は日英同盟を締結していた。 この草稿は、 高野山大学の 岡倉遺品の櫃底に眠 H る 日露 中戦争 「真正

岡倉が創刊した美術研究誌「國華」の編集主幹として実権を握るに至った離精一 は

目聡く引用し、 でに決定的に時代錯誤な謬見、暴論となってい に疑問視されていた(Smith 1912: 129-130)。とりわけ漢籍に依拠してか、 「東洋の理想」に見られる岡倉の学識への信憑性は、 年、陶倉の逝去の折に、同誌に無記名ながら、闘倉とその率いる日本美術院を公然と中傷する記事を載 の影響を見ようとする岡倉の説は、 鋭意紹介にこれ努めている (瀧 一九一七; Inaga 2012)。 岡倉晩年には た。瀧はそうした英国の権威筋による岡倉批判を、 ヴィンセント・スミスら、英国の学究たちによって、 (岡倉自身も自覚していたとおり)、 ガンダーラにギリシアの、ではなく、 歴史認識としてはす 自分の論説に

英訳の東洋画論から裨益するところがあった (瀧 一九一八)。 ンスを、日本美術院同様に無価値なものと否定的に論評する一方、法隆寺金堂壁画のフレスコ技法とアジャンタ 金援助を頼み、アジャンター壁画模写の調査隊派遣を実現する (Inaga 2009)。瀧は、 壁画との技法的類似を根拠に、 官学における美術史研究の権威者の地位を築きつつあった瀧は、第一次世界大戦が終結を見るや、 ・ウェイリーのみならず、ボストン美術館でいわば岡倉の後を襲ったAKCも、これら瀧が紹介に努めた漢籍 の日本版に他ならない。 世界大戦終了後のパリでの国際美術史学会でも瀧はその一班を披露する。 調査地の古代の栄華を寿ぐ一方で現代の停滞と没落を憂うる尊大な態度は、 と同時に瀧は 日本の学術調査が欧州のそれを凌駕するとの、 『國華』英語版の編集出版により、 (AKC 1974: 186; DS:41; 藤原 二〇一八; 範 二〇一八)。 中国絵画論の古典の英訳紹介に 国粋主義的な優位性を主張する ベンガル近代の絵画ル ロンドンの 当時主流 東洋学者アー の帝 国主義

### ヴ エ IV + Ź ユ 体制下 0) 植 民地状況 における「アジ アはひとつ

K ンでAKCへの面会を希望した一九一一年一月二五日付の書簡一通が採録されている (岡倉 vol.7, No169)。 1KCは本稿で扱う日本側関係者と、 いかなる交流があったのか。 現在の 『岡倉天心全集』には、 覚がロ

245

・ベンサム

利主義理念にも毒されず、愚かにも「美の理想」を追うことなど試み

また「最大多数の最大幸福」といったジェレミー

ひたすら明晰な本能とともに、

ン (AKC 1908: 4-5)°

こうしたAKCの信念は、

日本語訳序

生と死のありさまを表現しようとするも

炎の試練: 反植民地主義思想の往還

図6

帝国体制の

枠組を逸脱するものではなかっ

た

ح

(Guha-Takurta 1992

柳宗悦 (1889-1961)

友が深まった痕跡はない。とはいえ、

ともに若き日にウィ

・リアム

英国モデル

スのア

0

中世主義やゴシック復興をそれぞれの文化圏で独自に彫琢するうえで

両者における「民藝」

〈あい

だ〉

の探索という主題 理念の比較は ーツ&クラフト運動からも感化を受けていた両者は、

図 5

と接近する。 究に委ねたい

(金谷 二〇〇

Ĭ.

٠.

140-163)

ここから本稿はようやくインドと極東の

看過できない並行性を示す。

5

両者は親密に会話を交わす余裕はもたず、

0

創始者となる、

柳宗悦である

(柳一九八九 vol.21-1: 233; 638-40) (図

その先も、

とり

わけ

交

年に東京で講演をなした折、

重要な日本の審美家に会ってい

る。

その後

AKCは ー

九二〇

は実際に面談を果たす機会に恵まれたのか?

ケ条要求へ 一九一〇年に朝鮮を併合していたが、第一次世界大戦が終了するや、 は英国統治下で遂行され 録でも七千五百名を超える死者が確認される。 厚に窺える。 A K C の に無関係でもない 朝鮮では の反発として展開する。 インドでは、 -世シン そこには  $\equiv$ 一独立運動」 ハ たが、 ラ美術 発砲事件の現場だけで千五百名以上の死傷者を数えた。 A K C の最初の ・工藝 同様に柳宗悦の その間インドではアムリットサル と呼ばれる蜂起が半島全土を揺るがす。 英国人 は、 ケル への妻、 そしてアジア各地で突発した反植民地暴動は、 「民藝」の発見も、 ムスコ 工 1 ツ テル プレス の影響も顕著だった。 宗悦の朝鮮経験を抜きには語 の虐殺として著名な事件が、 アジア各地で民族主義が高揚する。 の 出版であ 中国では五 朝鮮では、 ŋ A K C ウィ リア 四運動が、 の イ 日本側による公式記 決して偶然でも互 4 n シ 四月一三日に ま ド 日本の二一 リス Vi 工藝史研究 日本は \_3

と悔恨の印」を見たことはよく知られる。宮廷の前面に位置する光化門(図6) たことで知られる。「朝鮮人を想ふ」(柳 一九二〇) 決定が下されたおり、 1100回:123-144)。 当時日本では「万歳事件」と呼ばれた朝鮮での 汝の運命は朝夕に迫っている。だが汝の命を死から救おうとする者は、 「他国民をもつとも深く理解するため」に不可欠との認識を示す。 雑誌 の必然の帰結だと述べる。 柳は門に 『改造』掲載の柳の手記は、 なかった 「汝」と呼びかけ、 (Inaga 1999)° さらに柳は審美家として で柳は朝鮮人の憤慨は当然であり、 騒擾の直後、 あたかも死刑執行に臨んでの弔い 日本では検閲で伏字だらけの悲惨な状態でしか刊行でき だがその 柳宗悦 (1889-1961) は ハングル訳や英訳は早くに巷に流 柳が朝鮮陶磁の 「宗教と藝術」 反逆罪に問われ が総督政府の命で解体されると 朝鮮の民への同 「独立の理想」はかれらの のような言辞を残してい 「線」のうちに る のだ、 布し 7 9

た (Yanagi 1919)。

で



光化門 当時の写真 絵葉書

ギリス人だったエルネスト・ 欧側の 重なる。 柳宗悦の主観的な思 る。 は支配者が被支配者に寄せる家父長的温情主義の義務感とない交ぜにな そのような批判や指弾は、 なるほど彼は、 インド美術に関する学識にも楯突いたが、 「たしかに それはグー ハ い入れには、 ヴェルは ハ インドにおける大英帝国の行政府に何度となく反対し ・タクルタがインド近代美術を分析する文脈 ビンフィールド・ インド現地の美術史を擁護 韓国側からのみならず、 植民者側 の尊大なる優越感が潜 ハヴェルにつ 対案とし 何度もなされてきた て彼が いて述べた見解と し再解釈 な 6

ここで「大英帝国」を「大日本帝 ・政治的限界にも当て嵌まる 国」に置き換えれば、 の ヴェ ル 批 は、 そのまま柳宗悦 の置 か n

248

国日本は、 化主義者が敗北を喫するとなれば、これはおかしな天罰 nemesis と言えるのではあるまい 視できまい。「欧州起源の帝国主義の工業主義が東洋において確立され、 ある。「アジアの荒廃が究極的には欧州の社会的理想主義の安寧を危うくしかねない、という深刻な危険」 て起つ者は剣にて亡びるのだ」と(水尾 一○○四:128)。聖書に由来する語句だが、これと同じ警告を 」と題する文章は、 とは と軍事拡張政策の両輪で、 いえ、 その植民地支配において、大英帝国のインド支配に範を仰ぐ擬態を不器用に演じることで、 AKCはスリランカの高位カーストの父とイギリス人の母をもち、 柳が「朝鮮人を想ふ」の末尾に書きつけた、「日本の同胞」に向けた警告は、 事実上の亡命状態にあった北米で、第一次大戦末期に執筆されたものだが、 まさにAKCの指摘する「天罰」の製造に邁進しつつあった、 ついにはそれによって欧州の脱‐ イギリスで成長した。「若きイン 考慮に値する。 か」と と見て、 そこにはこう (DS: 135)° Ā K 工業

are lost in the same spirit in which they are won. (DS: 118) りゃんはウォ 同じ文脈でAKCの口をついて出た詩句。 ここにはこの冷厳たる事実が、 ・せた警句だった (DS: 123)。 2の緒を締めよ」といった教訓とは違う。戦の勝者は、自らの敵愾心を分かち持つ次なる敵によって破ら 「勝利は憎悪を育 ついには暴君に成り代わる」、 ţ なぜなら征服され "The Iron hand crushed the tyrant's head/And became a tyrant in his stead,  $\mathscr{A}$ 籠められているだろう。 というわけだが、 し民は不幸なれ 明記はないがウィリアム・ブレイクが出典。 軽妙な脚韻が痛烈な皮肉となっている。 これを要するに ば なり」とはAK 「抑圧された国民は、 ルト・ホイットマンだが、 С が ダー シ 「暴君の頭蓋を砕 マ プダ 必ずやほか さらに る

國だ」と(柳 一九二〇:水尾:二〇〇四:128)。 自明な人倫を踏みつけるなら、 た。ここからは、 軍国化した日本は近代化成功のツケとして「物質化したアジア」という倒錯を具現する一方、朝鮮半島 に向けてその抑圧を二重に転写する傍ら、 したアジアとのあいだで、 と別のことではない。「自らの自由を尊重」するなら、 たニューヨーク時代のAKCの教訓だった。そして朝鮮人への弾圧を前にして、 |国民を抑圧し、さもなくば階級による別階級の抑圧を抱え込む」(DS: 123)。それがアナーキズムに染まっ 「アジアが欧州に与しないならば、 ひとつあらたなアジア像が提起される。 恐るべき葛藤が生ずるだろう、経済的のみならず軍事的にも」(初出 世界は日本の敵となるだらう。そうなるならば亡びるのは朝鮮では アジアは欧州に敵対することとなり、 これはAKCが欧州に対して述べた警告と入れ子細工の 帝国領土の内地でも「階級闘争」を内攻させ、 なぜ 「他人の自由を尊重し」ない そこでは理想主義の欧 柳が日本人同胞に説 のか。 悪化させつつあ 「若しも此 構造をなし H 州と物 くのも 0

アジアの国境を超えた知識人たちによって共有されうる環境が整った。 一九一九年のこと、 実際皮肉にも、岡倉覚三の「アジアはひとつ」が社会的現実として実感され 冷戦構造下、 そしてアジア各国の ヴェル わばその サイユ体制の確立によってはじめて「アジアはひとつ」 狂言回 民族分断の熾烈な戦争の裡に解体する アジア各国で連鎖反応のように、帝国主義支配に対する蜂起が勃発したがゆえ、ではなか しを演じる役廻りとなったが、 独立達成とともに(バンドン会議 その の の破局は、 非同盟連帯の夢もものかは)、 黙示録的にも、 日本は、 の呼び声は、世界市民的な訴えとし たのは、 アジア地域内の帝国主義勢力と 二〇年後には 「アジアはひとつ」 第 一次世界大戦終了 現実のも の て、

# 四 一世主義」と民衆的工藝の

れる教 る行政官だった、ジョージ・バードウッド卿の見解に極めて近い な存在が創りあげられている―一種の知的な不可触選民で、 り無限に完璧な、 究を踏まえつつ、 って **育さえあれば、それで伝統の絆を断ち切るには十分であり、** 一九一八年にインドについてAKCの語ったこの言葉は、 した観察を思い起こさせる。 マ しようというのではない。 ワスワーミが披歴した述懐である (DS: 101)。とはいえ、この両者を並列することで柳を植民者の立場か 「無理やり鋳型に嵌め込んでも何ら達成することはできない」とは「インド女性の地位」と題する文章で 育の罪」、「強いられ :の美」を認めえない の最大の危機とは、その精神的な高邁さ integrity がもはや本来の統合を失調することにある。」(DS: 127) ドは世界でもっとも悲劇的な光景を呈して 手工藝の分野でい 皮肉な事態にこそ「民藝」理念の原点を問う必要があろう。植民地体制下の朝鮮とインドとの 生きた壮大なる有機体が存在し、 それらとは異なる角度から探索を試みるのが、本章の意図となる。 て固有の美を失つて」行く朝鮮の喪失を「淋しく」思う柳 かなる藝術的な対話が可能だったのか。久慈(二〇〇五) 「半西洋化された趣味もなく気品もない愚かな図案」に柳は怒りを隠さない。 朝鮮の高等女学校で日本人教師の指導のもと、 実際、 土着の復権を願い外来の影響を嫌う柳の見解は、 いる。 それが壊滅する途上にあるのだから。 なぜならそこには中世欧州によく似た、 そのまま柳宗悦が朝鮮の美術教育の 西にも東にも属さず、 そこには根という根を失った、曰く言い難 (金谷 二○○五:144-145;橋本 二○一一)。 大作の刺繍が織られている。 過去も未来もない。 や金谷 (二〇〇五) (Yanagi 1919; インド植民地工 (中略) 一世代の英国式 現状を視察して しかしそ 全集 の イン だが 先行 一藝を司 へあ 朝 む U

A K C t 中世の欧州と類比することで、 インドのギルド体制を高く評価し、 擁護しようとした。 とか

1972: 208)° とその利点を強調する (DS: 26)。 義」に言及していることを奇貨として、 筈のジョージ・バードウッド卿でさえ『インドの工業藝術』で「非競争社会において普及する」「ギル る」靭帯であり、 行政官によって批判されがちだったカースト制をも、AKCは そこに「職人魂の直観と適性の遺伝」とが基礎付けされると主張する (DS: 125)。論敵だ 同様の論旨は柳宗悦が理想視する中世の職人組織論にも容易に見つかる(Yanag A K C は 「職工(シラバン)は競争や賃金カットから保護されて 「社会が職業集団ごとに(分離ではなく) ド った

n 藝の美が生まれ と美」との調和ある結びつきにこそ、工藝の本質を捉えようとする。 にし、日常生活の実用に職人たちが用いる道具の大切さを説く 移住した柳は中世の 「藝術家よりも無名な職人こそが無意識のうちに優位にたつ。 へと貶め 美はそれを用 柳は仲間とともに ねばならない ウィリアム・モリスの工藝改革運動は「民藝」という理念の把握に失敗しているどして、 残る唯一の道はギルド制度にある。 た。創造の自由と仕事へ の専心、 る。 .. ع いる人の役に立つことにあり、用いる人の愛情と熱意のお蔭で意味をもつ。 修道院に模範を頼み「修行、帰依、協団」を指導理念にして民藝協団を設立する。 他の職人たちとの 職人は、 「日本民藝美術館設立趣意書」を一九二六年に公表する。 (柳 一九二八:水尾:189-211)。 自我や個人意識から自由であるがゆえに工藝の美に達することができる。 の誠実を回復しよう。 「協力と相愛」のうちに、 (中略) 美しい工藝は職人たちの協働の結実である」。 手仕事は賃労働では 職 (水尾 二〇〇四:197-198)。 はじめて実現される。 人の無我こそが救済へ 「工藝の道」 関東大震災を機に京都 なく、 で柳はつぎのように説 再 の道を示す。 び価値と意義とに満たさ だが資本主義は労働を苦 「資本主義が手工藝を殺 この相互の愛から工 自分の立場を鮮 そして「用 そ の上賀茂 著名な個 て工藝

上を前提として、 A K C (cf.DS: 85) と柳の 理論的 交錯 0 可能性の 核へと分析を進め

た

## 五 の彼岸」:親鸞とニーチェ

そうすれば我らの生産能 productiveness は美しい完遂に至りうる」(DS: 121)。 るところを為せ」。このニーチェの教条は、 賛する利己というものは、 は有名な逆説だが、 と確信している限りにおいて、まさに「賞賛に値する」ことになお囚われている。 決して腑に落ちるものではないだろう」(DS: 120)。 己」とは 「賞賛に値する」などとは思っていないが故に、 の道 ない」(DS: 118)。 かなる利他主義よりも、 で柳は親鸞を引く 同様の常識転倒がAKCのニーチェ解釈にも見られる (AKC 1918: DS: 115-121)。 およそあらゆる行動は賞賛に値する、 「真のそして理想的な利己とは、 (水尾:二〇〇四:217)。 AKCに言わせれば、 さらに寛大な」(DS: 120) すでに「善悪の彼岸」(DS: 116) にある。 もとより親鸞の謂う 魂を監視の下に置き、 「善人なおもて往生を遂ぐ、 などと信ずる輩の見解に沿ってそれを解釈する 常識的な解釈とは異なり、 態度だといえるだろう。 ^ 「善人」 「ニーチェや他の神秘家たちが賞 それを抑制することにあ とは、 だが親鸞の W 自ら わん およそ「利己でも とすれ や悪人を が罪びとでは 「悪人」は、 「汝の欲す ば

だとAKCは続ける。 誰かしら個人の意志の産物ではない、誰か「他」なるものの「意志」すなわち「他力」 それゆえ「みずからを甘やかすような教義」doctrine of self-indulgence (DS: 121) であるどころか、 「理想の利己」とは「禁欲あるいは熱情(タパス)のひとつのかたち」だ、ということになる、 日常の雑器すなわち「下手物」は善悪の彼岸にあり、 たとえそれが他のすべての人々には邪悪と見えようとも、 これはほとんど柳宗悦の言う「無名の職人」の境地ではないか。「天才の活動は規則を遵守することで 柳もまた工藝の理想を「美醜の彼岸」に位置づける。 「自然」(じねん=おのづから) 内奥からの命に生命を捧げること」(DS: 119) 「無我」と「無心」の技であればこ の具現である、 そのものの表象となる。 とAKCは敷

分を甘やかすこととは無縁な人格のうちにこそ、 っとも把握し難い はけっして到達できない。 1972: 212-215)。ここで「天才」は通常の含意を裏切っている。「天才」と認知されたがるような者は もの 」(AKC「ニーチェを世界市民的に見る」: DS: 120)なのだから。 なぜなら「人類最高の達成にして目標とは、 柳はかれの理想とする「無名の 自己肯定的な心の持ち主にとっては、 職人」unknown craftsman そうした自己主張に欠け、 自 B

は本来の あるとすれば、 ここまで柳とク 〈自己〉 「力への意志」 柳には日本仏教に特有の「諦念」 Self 実現のための王道ではありえない」(DS: 86) と釘をさす。 マラスワー とは対極と映る。 ミの思索の類似を縒り合わせてみた。 とはいえAKCは「インド女性の地位」で 淵において「我々にとり最善のものは、 が支配的であり、 それは少なくとも表面的にはニ 両者において唯一著しく対照をなす なぜなら「空虚」な命、 自ずと手に入る。 「自我肯定 ego-assertion チェ だが 0) 死の 11

それを力づくで手に入れようとすれば、 抜ける」のだから、 六 ム (DS: "Sahaja"-それは永遠に我々の手から 「おのづから」: 109)

### 土から作っ た器をめぐる思索

するのだから。 破壊者であり、 「シヴァ神の踊り」(図7)でAKCはさらにこう述べる。 room をあけよ。 人の諺として、 およそ建設は残骸からなされ、 燃える大地を好む」(DS: 61) こうある。 破壊せよ、 「汝の魂や他の者たち なぜならおよそ創造は破壊 ځ 世界の何も その脚注 の魂 のため の シ も形骸 から発 には ヴ に 陶 7

図 7



舞踏の主 シヴァ(ナタラジャ) 銅に鍍金 Shiva as Lord of Dance (Nataraja), Copper alloy, Indian (Tamil Nadu), The Metropolitan Museum of Art

humanity を湛える茶碗(1906/1964: 1-9)とは、なんと隔たってみえること なさない。 む椀を叩き割れ」(DS: 62 note 2) でしかない。そして形骸は永遠に破壊されねばならない。 「場所」room を保証する。 たしかに炎は陶器を打ち砕く。 るものだが、 岡倉覚三が『茶の本』 そして器に穿たれた空虚 vacuum-void こそが、 人々の命とてもそれと変わらない。この熾烈なる破壊 と。陶工が土塊から作った器は最後に で賞賛した「ひと椀の だがその炎なくしては陶磁の器は形を 空虚は 人間性」 汝がそこから

a cup of

そこに

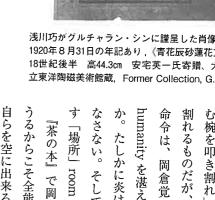
魂を宿

すべ

あ

りえな てを宿

V



浅川巧がグルチャラン・シンに謹呈した肖像写真 1920年8月31日の年記あり、(青花辰砂蓮花文壺) 18世紀後半 高44.3cm 安宅英一氏寄贈、大阪市 立東洋陶磁美術館蔵,Former Collection, G.Singh

と収まった写真がある たAKCが「欧州の若き精悍さと東洋の老いの静寂さ」(DS: 135) との うとしたのと同様に。 には朝鮮白磁の大壺が置かれている。 浅川巧(一八九一――九三一)は柳宗悦を朝鮮陶磁研究に誘った人物として知られるが、 〈あいだ〉にこそ、 「シヴァ の踊 ŋ この文脈で朝鮮陶磁研究の草分け、 に見えるクー 両者の隔たりに架橋する契機を見出すことはできまい (図の)。 照影には一九二〇年八月三一日の マラスワーミの破壊への誘いと、 柳らが催した朝鮮民族美術展でも展示の中心に据えられた著名な品であり 自らを空に出来る者だけが、あらゆる状況へと対処できる、 うるからこそ全能の潜性を秘めてい 『茶の本』で岡倉覚三は空虚の大切さを縷説した。 浅川巧を召喚したい 日付が書き込まれてい 岡倉覚三の「空虚」への誘いと。その両者 〈あいだ〉 る。 か。 空虚なくして運動は 第一次世界大戦の を 「結びつける」 る。 シンと名乗るイ シ ンと巧との

고) (1906/1964:

惨禍を眼

秘訣を探そ

図8

が英国ではなく日本を留学先に選んだ理由はどこにあったのか。 一一)らの調査で、グルチャラン・シン(一八九六—一九九五:以下GS)と判明 ij ットサル虐殺の発生した一九一九年に来日して東京高等工業学校に籍を置いたことも、 の草分けである。 プリンス・オヴ・ウェ ールズ大学で地質学を専攻したのち、 した。インドにおけるスタジ 陶磁の徒弟修業を積む 分かってきた。

現在では大阪の東洋陶磁美術館の所蔵に帰している。

白い

・ターバ

ンを頭に巻い

た人物は、

近年、

橋本順光氏

あ

V

だ

国したGSは柳が朝鮮民族美術館を創設したおり、けっして裕福でもないなかで、 ンド人 Singh が会話に加わった事実も付記されて に言及している (柳 一九八九: vol.21-1: 639)。 件に無関心だったこともあり得まい。柳は一九二〇年十月三一日のバーナード・リー しては最高額となる、 シーク教徒であったGSが虐殺事件に大きな衝撃を受けたことは、 破格に近い献金をインドから送金している (橋本二〇一五)。 婉曲な表現は検閲を考慮してのことだろうが、 いる。 グルチャラン・シン以外ではありえない。 想像に難くない。 金壱百円とい チ宛の書簡で「朝鮮 その彼が朝鮮 そこには う、 二二年に帰 ひとり の三・ 個人献金と か イ \_\_

してい 七月二二日付)で、 東京滞在中、 ここでキ 土塊は魂の入れ物でもあれば、 ば陶工の仕事はこの世で最も崇高だとは言えまい すべて死して土に還る。 カズンズは英字新聞 Japan Advertiser に寄稿したひとつの詩「実現―ある陶の藝術家へ」(| 九 リスト教と仏教とは手に手を取 GSは同じくインドから来日した詩人、ジェイムズ・カズンズの慫慂もあり、 陶磁製造を賞賛している 陶工はそうとは意識することもなく、これと同じ輪廻転生の技を繰り返 魂を含むための素材でもあるが、 (Cousins 1919)° り 神聖なる創造を寿いでい か。 日く 成形と破壊の円環はまた、 -聖書によれば神は土塊から人を創造した。 それもまた時代から時 る…と 聖書の創世記をも想起さ 神智学協会に参加 代 へと変成を遂げ している 一九年

こに陶磁制作におけるインドと朝鮮・ た Artist in Clay は、 日本の総合を見出していた。 他ならぬGSその人。 カズンズはGSの日本での作陶を高く評価 GSは特高警察や内務省の観察下に置かれ

は

七

シヴ

ア

神の

踊

ŋ

ある

41

は焼窯の

なか

などと

11

う名前まで頂

気戴してい

た

(橋本

2

耳

で作陶に打ち込み、

我楽多宗を自称する好き者集団にも仲間として遇され、

図10



《アルジュナに教えるクリシュナ》 スレ ンドロナート・カール "Krishna instructing Arjuna," By Surendra Nath Kar, in Myths of Hindus & Buddhists, 1913, p.188.

図9



それ

は世界を「悲観主義と楽観主義とを同時に打ち越した」彼方へと開き、

一九四三:182)(図9)

で、

AKCが引用したこの箇所に触れ、

そこに明ら

かなニーチェ主義の響きを聞き取り、

とを注ぎ込む。

それと同じことを神もまた人に為す」

(DS: 59)

ځ

これ

はまた陶工の窯の比喩でもある。

焰の精髄の洗礼を浴び、

土塊は堅い器の形状を帯びて成形され

岡本貫瑩(一八九九

— | 九四八)

はその

(今日では忘れられた)

名著

『印度美術

0

主調と表現

(岡本

九三

AKCは欧州中世の神秘家、

マ

イス

夕

エ ッ

ク

ハル

ŀ

の言葉を呼び覚ます。

「炎は乾

V.

た木材 これらの

に精

髄と清

澄

聖句に沿えて

える大地」。

さらに

「ティル

ヴァ

ータヴラ

ール・プラーナム」

もこう伝える。

「我らが主は踊り

手

な

それが火葬、

スリ

・ナタラージ

t

が躍

る、

シヴァ神の踊り

は破壊の炎。

「自我が破壊

そこで彼らは聖なるものを

13

満たされる」(DS: 62)

೬ೢ

解脱は自己滅却なくしては成就しない。

切る沈黙の聖者たちは、

おのが

を滅するところに立脚する。

ヴ

ア

神の

踊り

でAKCは

「ウン

マ

1

ヴ

イラカム」

からこう引用する。

「(過去現在未来)

の三世

0

煩悩

た場所こそが、

迷妄も事象も焼き尽くされる状態を意味する。

た熱と同じく、

彼はその力を物心のうちに伝え、

今度はそれらを躍らせる」(DS: 59)と。

物質

の喜び

がある、

と解説する。

先立

つ章でも岡本は

マ

ハー

バ

ーラタ

から引用

戦い

に臨ん

で逡巡する

そこには

「破壊を経て永遠に変わる

ジュナに対するクリシュナの有名な忠告に言及する。

不作為の誘惑に屈することなか

n

な

んとなれ

ば

内なる解脱を成就するほどの者どもには、

曰く

「汝が仕事に専心

そ

れが齎す結果に心を悩ま

岡本貫瑩『印度美術の主調と表現』 書房1943 (箱と表紙). Okamoto Kan'ei, Indian Art, Its Dominants and Expressions, Unehi Shobo, 1943.

遺著では、 で暗に依拠 悪も存在 検閲を厭ってか、 10 したインドの古典に他ならな いうまでもなく、 翻訳はこの直前の箇所まで ゆえに これはニー cf. Nivedita V チ (ニヴェ I が 善悪 AKS

絶えることなき湖を感知する」(DS: 62-63; 岡本: 163) (Maha-pralaya) じょっト、 世界に送る。 踏む旋律は、 K 0 ビンはこ と語る。 C 存在に在り は「シヴァ (DS: 66) 而して又吾々の魂に、 れに感化を得てこう作詞 吾々 AKCも言及するとおり、 とも記してい 洏 の魂から永劫の 神 して聖霊は、 0 宇宙 踊 ŋ (Samsara) た。 で 不滅の燈火を点すのである」 幻を打消して、 "the fire which 'changes 自由意志の浄き力 岡本はこれを した。「汎 は押し包まれ ロシ アの ろい 敷衍 作曲家スクリ 吾々を真実の 大きな炎 て D は

器が自然との らは ささか驚くべきことに、 な表明であ 生命の鼓動であり、  $\sim$ と立ち昇る雲を、 0 「刷毛目」に触れた文章で、 調 和 のうちに、 器を作っ 思い起させる 吹く風の自然の旋律を、 そのなかで立ち上が た人々によって 柳宗悦も朝鮮 こう回想して それ の三島手 生きら は り横 自然界の 机 ゆく河の たわる平穏 V それ た。 生命 流れ 5 0

「鷲龍寺獅子梵刹シング」

図11

グルチャラン・シン 滞日期の白磁炻器 Stoneware pot with celadon glaze made by Gurcharan Singh in Japan in the early

twenties, in Pottery and the Legacy of Sardar Gurcharan Singh, 1998, p.155. なる心の炎の現れなのである」と(Yanagi 1954; 1972: 173. ここで 浅川

cf.Chandra 1983: 52-53) ° る意味でA・K・クーマラスワーミと柳宗悦との〈あいだ〉に遺された「間隙」room を陶藝の炎によって結び 一一)。蓮華経に依拠した「水の図像学」にはAKCも宮殿建築を巡る論文で言及することとなる (AKC 1956; ることを根拠に、 つけたとはいえまい 東方伝播を証する。 アジャンター壁画が七世紀の法隆寺金堂の壁画にまで影響を及ぼしていた 〈あいだ〉 それとは逆方向の連鎖が、陶磁器の炎を通じて一九二〇年代に模索された。グルチャラン・シン インド美術ギリシア起源説に固執した。だが朝鮮に花咲いて延命を遂げた仏教図像は、 を、 か。 その蓮模様をインドに持ち帰ることで、 それはまた文明史的な意味で 植民地下のアジアにおいて、 ca. (1919-20) ドウッド 国前後のGSの作例にも散見される たのが、 反訳したもの)。 磁の壺には、 の日本語は The Unknown Craftsman に掲載の柳自身の英文から日本語に 「ひとつ」に結び付ける使者の役割をも果たす、 「東西を隔てるものと思われた深淵」 巧とグルチャラン・シンとの肖像写真の間におか ほかならぬグルチャラン・シンであった。 はギリシア起源のパルメット紋がガンダーラに頻出す 蓮の花の文様が描かれている。 GSはアジア文明圏に往還を実現した そしてこの朝鮮の窯の火をインドへと持ち帰 と当時は信じられてい

(図 11)。

植民地行政官バー 同じモチーフは帰

n

た白

(橋本 二〇

蓮華文

するなら、

越し難い 「炎の舞」

(BS: 135) (

はあ

そうした その跨ぎ

の姿だっ

た。

【出典文献】 紙幅制限超過のため、 されたい。 注は主要な出典注に限定し、本文割注は節約を旨とする。 詳しくは本稿英語版を参照

なおクーマラスワーミは以下本文割注ではAKCと略記する。

Chandra, Pramod 1983- On the Study of Indian Art, Harvard University Press

Coomaraswamy, Ananda K. 1908: "The Aims of Indian Art," Essex House Press

- 1908/2003: Mediaeval Sinhalese Art, 1908/ second edition, Munshiram Manoharlal Publisher 2003
- -1915: "What has India Contributed to Human Welfare?" Athenaeum, 1915; D.S
- 1916: "Intellectual Fraternity," in The Danse of Siva, 1924.
- Reprint,1985 (DSと略記する) 1918/1924/1985 The Dance of Siva, Essay on Indian Art and Culture, New York: Sunwise : Turn/ Dover
- -1931: "Bodhigparas Palaces," Eastern Art, Vol.3, pp. 181-217
- "Christian and Oriental Philosophy of Art," in The Transformation of Nature in Art, N.Y., Dover Publication
- -1974: "The Theory of Art in Asia," in The Transformation of Nature in Art, Munshiram Manohlal Publisher

Cousins, James H. 1919: "Lines (To an Artist in Clay)," The Japan Advertiser, Sunday July 6, p. 6

Guha-Thakurta, Tapati 1992: The Making of a new 'Indian' art, artists, aesthetics and nationalism in Bengal, c.1850 Cambridge University Press

Havell, Ernest Binfield 1911-12: Ideals of Indian Art, New York: E.P. Dutton

Inaga Shigemi 1999: "Reconsidering the Mingei Undô as a Colonial Discourse: Craft, "Asiatische Studien, Zeitschrift der Schweizerischen Asiengesellschaft, Vol. LIII, Nr. 2, SS. 219-230 The Politics of Visualizing Asian Folk.

2001: "Okakura Kakuzô's Nostaligic Journey to India and the Invention of Asia," Susan Fisher (ed.), Nostaligic

Columbia, pp.119-132 Journeys,Literary Pilgrimages Between Japan and the West, CJR Japan Research Series, University of British

260

- Okakura Kukuzô's Indian Writings and the "Function of Art in the Shaping of Nationality," Japan Review, -2004: "Sister Nivedita and her Kali The Mother, The Web of Indian Life, and Art Criticism: New Insights into , No.16,
- 1945)," Japan Review, No.21, pp.149-181 -2009: "The Interaction of Bengli and Japanese Artistic Milieus in the First Half of the Twentieth Century (1901
- Across Borders," Review of Japanese Culture and Society, Vol.XXIV, pp. 39-57 -2012: "Okakura Kakuzô and India, The Trajectory of Modern National Consciousness and Pan-Asian Ideology
- Kikuchi, Yuko 2004: Japanese Modernisation and Mingei Theory, Cultural Nationalism and Oriental Orientalism Curzon Routledge
- Kumar Das, Sisir (ed.) 1996: The English Writings of Rabindranath Tagore, New Deli: Sahitya Akademi, vol.1-3
- Lal, Anupa (ed.) 1998: Pottery and the Legacy of Sardar Gurcharan Singh, New Delhi : Delhi Blue Pottery
- Nivedita, Sister 1903/2007: "Introduction,", The Ideals of the East, 1903; Stone Bridge Classics 2007
- (CWSN) vol.3, pp. 44-52 -1909: "Mediaeval Sinhalese Art" (Review) The Modern Review, Dec. 1909: Complete Work of Sister Nivedita
- & A.K.C. 1914: Myths of the Hindus and Buddhists, preface, pp.v-vii.
- -1967-68 Complete Work of Sister Nivedita (CWSN) Advaita, Ashrama, in 6 vols
- Okakura Kakuzo1903/2007: The Ideals of the East, 1903/ Stone Bridge Classics 2007
- Okakura Kakuzo 1906/1964/2007: The Book of Tea, 1906/ Dover reprint 1964/ Stone Bridge Classics 2007
- Singh, Gurcharan 1979: Pottery in India, New Delhi: Stosius Inc/Advent Books Division
- Smith, Vincent 1911: A History of Fine Art in India and Ceylon, Oxford: Clarendon Press

Tagore, Rabindranath 1929-1996: "On Oriental Culture and Japan's Mission." Address to the member of the Indo-Japanese Association, Tokyo, 15 may, 1929; Kumar Das 1996, vol. 3.

Yanagi M. 1919: "An Artist's Message to Koreans. Japan's Mistaken Policy and Advertiser, wed. 4 August, 13. p.4 Korea's Sad Fate," The Japan

Yanagi Muneyoshi 1954/1972: "Hakeme (1954)" The Unknown Craftsman-A Japanese Insight into Beauty, adapted by Bernard Leach, Tokyo: Kōdansha International

- 岡倉 一九七九—八一:『岡倉天心全集』平凡社
- 岡本貫瑩 一九三二/一九四三:『印度美術の主調と表現』六文館(一九三二):畝傍書房(一九四三)
- 葛西実 一九八三:「A・K・クーマラスワーミの東西思想の比較と危機意識」『比較思想研究』Vol. 10, pp. 81-189
- —一九八四:「時と永遠—A・K・クーマラスワーミの比較宗教学」『比較思想研究』Vol. 11, 1984, pp. 142-149
- 金谷美和 二〇〇五:「民芸的なるものの誕生―アーナンダ・K・クーマラスワーミーとの比較を契機として」熊倉功夫・ - 一九八五:「ヒンドゥ教と仏教 – A・K・クーマラスワーミの比較宗教学」『比較思想研究』 Vol. 12, 1985, pp. 143-146
- 久慈達也 二〇〇五:「反近代の思想家が描いた美術館 吉田賢司(編)『柳宗悦と民藝運動』思文閣出版、pp. 140-163 ―A・K・クーマラスワーミと柳宗悦を中心に」『国際文化研究
- 11巻、Vol.11, 2005, pp. 235-249
- クーマラスワミ 一九一三・一九一六:『印度美術史』蘇武緑郎・岩崎真澄(共訳)向陵社
- 瀧精一 一九一七:「健駄羅藝術の批評に就て」「書画骨董雑誌」vol. 103, Nov. pp. 1-8 クーマラスワーミ 一九四四:『印度及東南亜細亜美術史』山本智教訳、北海出版社
- 瀧精一 一九一八:「印度美術研究の必要に就て」 『大阪朝日新聞』14-18 April
- 野村良雄 一九五九「クーマラスワーミ『キリスト教と東洋の芸術哲学』 『自然の芸術への変化』」『美学』pp. 65-68

- 業と韓国民族工芸に関する研究』 Korean Press Center, 2011, pp. 126-7 -二○一一:「浅川巧とグルチャラン・シン:インドに伝えられた朝鮮陶器の美」『時代の国境を超えた愛:浅川巧の林
- 田治彦(編)『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究:日英に広がる21世紀の地平』(大阪大学)、pp. 27-43 -二〇一三:「アイルランド神智学徒のアジア主義? ジェイムズ・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波」藤
- 248: pp. 56-60; No249: pp. 54-59; No 250: pp. 52-57) -二○一五:「インドの陶芸家グルチャラン・シン」『民藝』No 247 to No 250. March to June. (No 247: pp. 52-56. No
- 藤原貞朗 二〇一八:「天心の子供たち:日本美術史の思想はいかに継承されたのか」井上章一(編)『学問をしばるもの』 範麗雅 二〇一八:『中国芸術というユートピア:ロンドン国際展からアメリカの林語堂へ』名古屋大学出版会 思文閣出版、pp. 53-70
- 水尾比呂志 二〇〇四:『評伝 柳宗悦』筑摩学芸文庫版
- 村井則子 二〇一八:「翻訳により生まれた作家―昭和10年代の日本における「岡倉天心」の創出と受容」河野至恩+村井
- 則子 (編)『日本文学の翻訳と流通』勉誠出版社、2018, pp. 164-186
- 柳宗悦 一九八九:『柳宗悦全集』筑摩書房 Vol. 21-1
- -一九二〇:「朝鮮人を想う」「改造」六月号 (一九二〇); 水尾二〇〇四
- 一九二八:『工藝の道』、ぐろりあそさえて
- 渡邊たまき 二〇一一:「A・K・クーマラスワーミの解釈学」『宗教研究』、Vol. 84, No.4, 2011, pp. 249-251